

調布市における土地利用の変遷と公共用施設の充実

関 典 江

調布市は、東京都のほぼ中央にあり、三鷹市・武蔵野市・狛江市などとともに、区部に隣接したベッドタウンである。現在では地価が高く、新しく個人で土地を所有することなど不可能に近いが調布市にも、地価の安い郊外の時代はもちろんあったのである。

その頃に、調布市にはレジャーや観光、その他広域の人々を対象とした施設が次々に作られ、現在に至っている。

このような施設が、区部隣接地域の中でも特に調布市に集中することになったのはなぜなのかを明らかにすると同時に、これらの施設が、地域の都市化に与えた影響を考えるのが、この論文の目的である。

この論文では、レジャー、観光、レクリエーション、その他広域の人々を対象とした施設を公共用施設として話を進めていく。

調布市は区部隣接4市の中でも、都市化が遅く、短い期間に急激に進行している。これは、大正末期ごろからレジャーや観光、そして環境保全のための対象地域として注目されてきたため、武蔵野市や三鷹市のように商業や工業において発展することもなく、また狛江市のように純粋な郊外住宅地として発展することもなかったためである。

大正14年に関東大震災がおこると、その復興のために、多摩川の砂利の需要が急増した。そこでそれまで人手で行われていた砂利採掘も機械で行われるようになり、大きな砂利穴が多所にわたって出現した。これに目を付けたのが京王電気軌道株式会社や、東映で、この地に多摩川原遊園京王閣、京王百花苑、そして東宝ゴルフコースなどが作られていった。

昭和初期には、都心の人口が急増し始め、郊外

が注目を浴びるが、それとともに都市環境について考えられるようになる。関東大震災の教訓として残された、「都市には公園などのオープンスペースは防災に欠かせない。」との考えも相まって、環状緑地帯構想が生まれた。

これは、東京区域の外周に沿い、環状の緑地帯を設け、永久にこれを残すというもので、この大部分を、武蔵野の森が占めていた。武蔵野の森をそのまま利用して作った神代植物公園も、武蔵野の森を切り開いて作った調布飛行場も、この構想が基礎となっている。

このように、調布市に公共用施設が多く存在する理由は、まず、私鉄の沿線にあったこと。そして調布市の持つ、独特の自然環境。さらに、歴史的な事件。この三つがお互いに作用しあったためであると言える。

レジャーや観光施設が多く作られ、それに伴ってバスの路線が開設されたり、施設のまわりちょっとした歓楽地ができるなど、多少プラス方向の影響も見られたが、直接、商店街の発展や、市の活性化につながることはなかった。

かえって、郊外住宅地として膨張し始める時期を遅らせ、高度成長期に、急激な膨張をみることになり、調布市自体の都市環境の整備が遅れがちになった。

現在それらの遅れを取り戻すべく、商店街の整備や、文化施設の建設に力を注いだり、現在まだ話し合いが進行中の、調布基地跡地にも、スポーツやレクリエーションなど人々のふれあいの場が計画されており、調布市は、都心に近い所でありながら、都市機能をさらに充実させていけるだけのキャパシティを持つ地域であると言える。